日本經濟新聞

「がんを知る本」で備え、向き合う　大人も子どももがん教育

日本は男性の 3 人に 2 人、女性の 2 人に 1 人が生涯にがんを経験する、世界トップクラスのがん大国です。がんは細胞の老化ですから、高齢化する日本にがんが多いのは当然です。

何度も書いていますが、がんは本来コントロールが可能な病気です。ところが日本の現状は課題山積です。

加熱式たばこへの規制の甘さを筆頭に、がん検診の低い受診率、がん治療の手術偏重、緩和ケアの遅れは課題です。科学的根拠が乏しい検査キットの存在や、効果がないのに法外な費用がかかる民間療法など、問題を挙げたらキリがありません。

背景にあるのは、日本人が「がんを知らない」という現実です。欧米や東南アジア諸国と比べて日本人のヘルスリテラシーは低く、世界最低ランクに甘んじています。

がんは、わずかな知識と行動によって大きく運命が分かれる病気です。保健体育にかんする学習要領に「がん教育」が明記され、学校では遅ればせながらも必修化されています。一方で学校教員のうち保健体育の先生の喫煙率が一番高いというデータもあり、不安も残ります。

子どもと比べると、大人の現状はもっと深刻です。がん教育という国家的な課題を念頭に、がんに関する必要最低限の知識をまとめた小冊子「大人も子どももがんを知る本」を製作しました。かわいいイラストをちりばめた 64 ページの水色の表紙の冊子で、発行数は累計 110 万部を超えました。

「働き盛りに多い女性のがん」「欧米型のがんが増えている」「がんでも辞めない、辞めさせない」といったテーマから、「早期に発見できるのは 1～2 年」「ワクチンは小学 6 年からできるがん対策」「放射線治療は、からだにやさしいがん治療」など、重要なトピックを 20 以上、網羅しています。

生命保険会社に勤める知人から最近、この冊子にまつわるエピソードを聞きました。彼女が冊子を渡した 40 代の顧客が、程なく進行した乳がんと診断されました。顧客からのメッセージの一部を知人が知らせてくれました。

「家で小学 4 年生の子どもが、あなたからもらった青い本を暗唱できるくらい熟読しているのです。7 ページ目の『男女の年代別がんの罹患（りかん）数』のグラフのことも一生懸命わたしに説明してくれます。抗がん剤で脱毛していく母を悲しませまいと、本人も子どもなりにこの状況を受け入れようといろいろけなげな態度を取ってくれるので、ありがたいです。子どもにも読みやすい本当にいい本ですよね」

冊子は書店では扱っておらず、朝日出版社の HP で 100 冊から購入可能です。

2026 年 4 月 22 日